



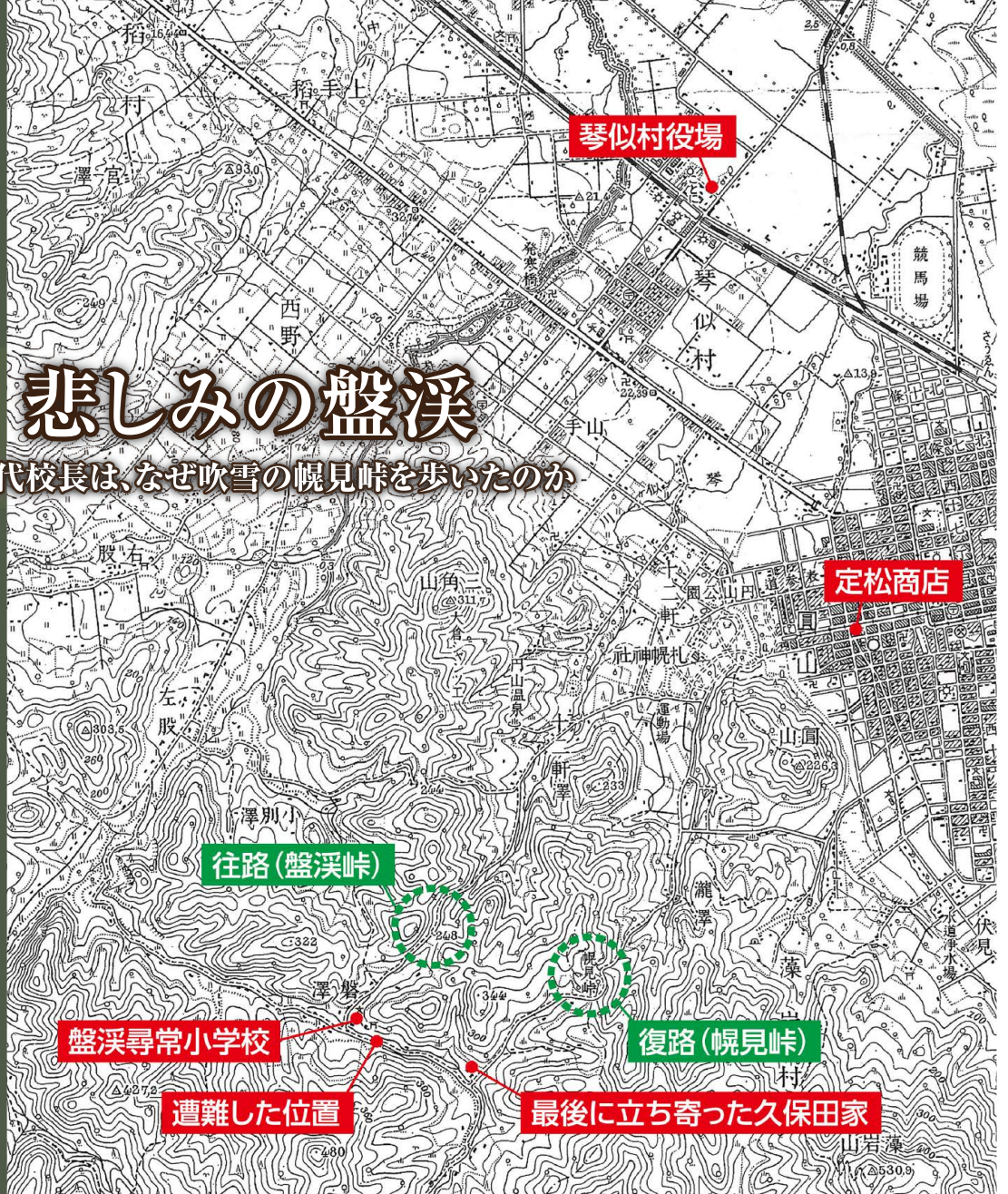
1922 悲しみの盤溪

結城三郎初代校長は、なぜ吹雪の幌見峠を歩いたのか

和田 哲

関連する場所の地図。
大正11(1922)年の
道路網はこの地図に
比較的近い。

陸地測量部発行2万5千
分の1地形図「札幌」(昭
和10年)



「盤溪」の旧地名は「盤之沢」

中央区盤溪は琴似発寒川に注ぐ盤溪川の上流にあり、以前は札幌郡琴似村に属していた。その響きはアイヌ語で川下を表す「パンケ」を想像させるが、昭和18(1943)年に旧地名の「盤之沢」から改称している。直接は結びつかない。しかし、盤之沢の「盤」は「パンケ」が由来である可能性が高い。琴似発寒川の上流に注ぐ2本の沢を「川上(パンケ)の沢」「川下(パンケ)の沢」と呼んでいたと思われる。琴似町議会の公式な資料では「盤」について「岩盤露出の箇所あり、清流岩を噛む」と説明しているが、これはさすがに無理があるだろう。山の中の沢はたいてい岩盤が露出していて、岩を噛まない清流はないからだ。

実は、盤溪という言葉はもっと早くから地元ですでに使われていた。名付け親は盤溪尋常小学校の初代校長に任命されていた結城三郎。大正11(1922)年、分校

だった盤之沢特別教授場の独立開校が決まった時に、学校名を「盤之沢」から漢文調の「盤溪」に改めた。地元の人たちはこの名前がよほど気に入ったらしく、小学校に続いて盤之沢神社の名前も、社殿の改築を機に盤溪神社に改めた。神社の名前を変えるのはよほどのこと。この時に住民たちの合意は出来上がったと言っていい。後の正式な地名変更は、既成事実の事後承認に他ならなかったのだ。

結城三郎は、学校まであとわずかの場所で

盤之沢では明治28(1895)年から炭焼きが始まったが、最初は西野から川伝いに入る道しかなく、次いで明治38(1905)年に荒井山経由の通称盤溪峠、大正3(1914)年に円山西町への幌見峠の道ができた。北ノ沢への道路開通はさらに半世紀後だ。

琴似尋常高等小学校の分校「盤之沢特別教授場」の



1. 幌見峠の円山側入り口。建物が少なく森林に囲まれる沿道風景は、事件当時と大きくは変わっていないのだろう。
2. 結城の遺体が発見された場所。写真の右奥には現在の校舎が見えている。立ち寄った民家から約1km、学校の門までと約200mの地点だった。
3. 教え子や地域住民らが昭和39(1964)年に建立した「あゝ結城先生」の石碑(左端)。近年、校章入りの台座や肖像などが整備された。

開設は明治45(1912)年。しかし、市街地からの遠さに教師たちは次々と音を上げ、逃げ出した。そんな中で大正6(1917)年から6年間教師を務め、人格者として子供からも大人からも慕われたのが結城三郎だ。彼は分校を独立させようと住民たちと尽力。それが実り、大正11(1922)年12月に開校することが決まった。結城は新しい学校に「盤溪尋常小学校」と命名する。

開校式を3日後に控えた12月21日、結城は初代校長の辞令と教育勅語を受け取るために羽織袴に身を包み、盤溪峠経由で琴似村役場に出向いた。役場を出たのは午後2時。まっすぐに盤之沢には戻らず、円山で知人が営む定松商店に立ち寄る。開校式などで勅語を扱うのに必要な袱紗と白手袋を買うためだったが、あいにく在庫がない。店主は問屋まで調達に出かけた。無事に品物を入手した頃にはすでに真っ暗。しかもこの年の12月の札幌では、記録によれば雪が約1mも積もっていた上に、この晩も激しく降り続いていた。これから徒歩で峠を越えるのは危険だ。結城は店主から宿泊を勧められるが「大事な勅語を持っているので民家に泊まる訳にはいかない」と辞退。提灯を借りて幌見峠経由で盤之沢に向かった。吹雪の中、深い雪を漕ぎながらどうにか峠を越え、顔なじみの久保田家に立ち寄った。ここでも宿泊を辞退し、2本目のロウソクに点火。もう夜10時半だったが、ここまで来れば着いたも同然だと思ったのかもしれない。

だが、そこから1kmほど進んだ所で力尽き、翌朝、雪の下で遺体となって発見された。享年42。校舎の灯りがもう見える場所だ。教育勅語は着ていた羽織に包まれ、その胸にしっかりと抱かれていた。そこに乗せられた遺体を囲んで教え子たちは泣いた。残された家族はもちろん、地域全体が悲しみに包まれたという。

往路と同じ盤溪峠ルートではなく、わざわざ遠回りの幌見峠ルートを選んだ理由については、分校独立のために戦った同志である久保田家に立ち寄って、辞令を一刻も

早く見せたかったのだろうと地元では語り伝えられている。確かに結城は立ち寄った。しかし私は疑問をぬぐえない。吹雪の夜道を歩くのは危険だ。安全に帰ることを優先し、同志と喜び合うのは明日にしようとするのが冷静な判断なのではないだろうか。だとすれば、視界の悪さで道を誤ったか、森林に囲まれた幌見峠ルートで吹雪の直撃を少しでも避けようとした可能性も考えられると思うのだ。

教え子たちが40年後に石碑を建立

悲劇から40年後の昭和37(1962)年、分校設置から50周年の式典に当時の教え子が参列した。ところが、式典では結城に一言も言及されなかった。開校式の前に亡くなったので歴代校長として記録されていなかったのだ。教え子たちは衝撃を受ける。分校独立のために尽力し、盤溪の名付け親でもある結城が忘れ去られてはならないと、彼らは行動に出た。趣意書を作成して寄付を募り、校庭の一角に「あゝ結城先生」の石碑を建立。昭和39(1964)年5月の除幕式は新聞で報道された。教え子たちは碑の前で、結城に教わった「金剛石の歌」を感慨深く歌う。

現在も同じ位置にある札幌市立盤溪小学校。市の小規模特認校に指定され、自然に恵まれた環境で学びたい学区外の子供を受け入れている。

和田 哲(わたさとる)

株式会社あるた出版 O.tone編集デスク
街歩き研究者

■ profile

1972年札幌生まれ。札幌旭丘高校、日本大学法学部卒業後、広告代理店を経て2012年から現職。古地図や古写真、道路のずれから札幌の歴史をひもとく、O.toneの連載や講演活動などで発信している。2015年にNHK「プラタモリ」札幌編で2人目の案内人を務め、現在はHBC「今日ドッキリ」やHBCラジオ「朝刊さくらい」などに出演中。2020年にO.toneの連載をまとめた「古地図と歩く 札幌圏」(あるた出版)を出版。

